

最上川が峡谷を抜けて庄内平野へ出る地点に、江戸期までは清川関所と宿場が在った。明治期の鉄道敷設までは、日本海沿岸と内陸を結ぶ往来や物流の要衝で、抜け荷を監視する船見番所も置かれていた。芭蕉はここで下船し出羽三山へ向っている。

東京を出て正午前に清川駅に着いた我々は、先ず復元された関所や番所を見学する。出羽三山参拝者の登拝口として往時は年間三万人が宿泊したという。帆船が行き交う明治初期の展示写真を見て、その賑わいに思いを巡らす。

今日中に羽黒山山頂へ着かねばと先を急ぎ、慶長年間に開削された北楯大堰疎水に沿う巡礼道を軽快に歩み始める。この用水が庄内米の源なのだ感慨に耽り、途中の狩川では林立する発電用風車を見て、思いは喫緊のエネルギー問題へと飛ぶ。

なだらかな上り坂が数里も続く。同行のS翁は快調に先を行き、彼になかなか追いつかない。喉が乾き、汗だくとなる。M兄が熱中症を心配し、飲み水を探してくる。這う這うの体で山麓の黄金堂バス停へ到着、山頂行き最終便になんとか間に合う。逃したら更に二千五百段の石段を登らねば成らなかつた。

三神合祭殿で参拝し、参籠所齋殿にチェックイン。泊り客は神主の見習いらしい数名の団体と我々三人のみ。だだっ広い座敷に通され、名物の精進料理が出る。筍、蕨、うど、ふき等、豪華な山菜料理が並ぶ。だが私は疲労が残り、なかなか喉を通らない。静寂のなか廊下の先からは祝詞斉唱の音が響く。

翌朝、鳥のさえずりに目覚め外を眺めると、太い杉の林に白く濃い霧が立ち込め、東山魁夷の絵のようである。赤毛氈が敷かれた長い回廊の階段を上り、拝殿での朝礼祈願へ。参拝者は二人の神主と我々三人である。お神酒を頂戴し自室へ戻ると、清々しく質素な精進料理が並び何とも美味しい。

霧のなか齋殿を出立し、長い杉並木の石段を滑らぬよう恐る恐る下る。五重塔や爺杉、不動明王の滝などに寄り、麓の玉川寺の庭園を觀賞。近くの大鳥居より鶴岡へ向けてバスに乗る。



清川船見番所



霧の羽黒山齋殿



精進料理朝食



羽黒山山頂